

【コメント 1】

戦 曉梅 ZHAN Xiaomei

東京工業大学外国語研究教育センター

1. 1893 年の中国旅行と美術官僚岡倉天心の模索

岡倉天心が初めての中国旅行を通じて、そこで実際に目の当たりにする風景から「写意」を主な特徴とされる中国の山水画に深い「写生」の伝統があるのを認識し、さらに日本の水墨画の巨匠雪舟たちがその「写生」によって一つの独自の山水画世界を築き上げたのを確信していったということを、本発表で興味深く伺った。岡倉天心が中国で目の当たりにする風景を宋代画家の作品構図と照らし合わせたことや、蘇軾 (Su Shi) などの文人画家、及び中国画論に言及することから、天心の中国に対する強い興味が窺えると同時に、このプロセスにおいて天心自身の中国絵画、画論に対する認識の混沌が窺える。これを逆に見ると、美術官僚としての岡倉天心による日本美術の創造への模索として強く感じられる。

岡倉天心が初めて中国旅行を行ったこの 1893 年前後というのは、西洋の写実主義が盛んに画壇に影響を与えた時期でありながら、天心にとってはフェノロサとの出会いによって、西洋一辺倒に対する伝統主義者として自覚し、また、文部官僚として、実際に日本伝統美術の振興に積極的な活動を行った時期でもある。つまり、天心が美術官僚として、独自の日本美術の創立という大きな目的、理念のもとで、この中国旅行は行われた。そこで西洋の写実主義と対抗するための何かを日本あるいは東洋の伝統から見出そうという岡倉の信念と努力はこの中国旅行における東洋のリアリズムである「写生」の発見の中に強く反映されている。

2. その後の岡倉天心の芸術哲学、日本美術院の創作活動に関連して

岡倉天心が半年にわたる初めての中国旅行を終えた翌年の東邦教会での講演で、自らの中国旅行の大体の径路を語り、また中国美術や日本美術の特質について、三つのことを確信したことを語ったことはよく知られている。第一には、中国に中国という通性がなく、強いてそれをつかもうとすれば、黄河流域と揚子江流域の二つの地域にわけて考えねばならないこと、二つ目に中国とヨーロッパとの密接な関係を語り、日常生活の形式においては、中国は日本よりもヨーロッパに近いこと、そして、この旅行を通じて、日本美術は中国美術に淵源することは言うまでもないが、日本美術は日本美術としての特色がある。つまり日本美術の中国美術からの独自性についての強い確信を得たこと、である。

これらのものは後に岡倉天心がアジア文化を宣揚し、とりわけ日本文化の伝統を重んじる姿勢に結びつく重要なものとして考えられる。そして、彼が美術を中心に語った政治性の強い文明論のベースにもなることは言うまでもない。これに関連する質問だが、岡倉天心は後のインド旅行で「西洋」に対する「東洋」という姿勢を確立し、日本を大きく左右

した独自の美的哲学を形成する大きな成果を挙げたように、1893年の中国旅行においての「写生」の発見はその後成熟していく彼の芸術哲学に結びつくものがあったのだろうか、更には、天心が指導の中心に立った日本美術院の画家たちが、日本画の近代化を図るための創作活動に何らかの形で反映されていたのだろうか、具体的に教えていただきたい。